



春の山

夢吊橋渡る聖火や春の山 吉光ヨウ子

春の山は明るい光と温かな空気に包まれています。夢大吊橋は今年で十五周年を迎えます。その記念すべき年にオリンピックの聖火が橋を渡りました。聖火ランナーは、九重町とゆかりの深い歌手の芹洋子さん。九重の山々も歓迎しています。

歳時記

今月の推薦句

八文の靴で入学昭和の日 竹石 末子

すぐ大きくなるので大きめの靴を履いて入学。昔はセンチではなく「文」でした。ご自分の少女時代の思い出とお孫さんの入学が重なりあいます。季節が動きません。

桜餅孫の数だけ残しおり 佐藤 次江

おいしい桜餅、お孫さんの分は残しました。ただそれだけの句ですが、中七で可愛いお孫さんは何人かなと想像が広がります。省略の一句です。

幟立ち指一本の誕生日 小田 純子

一本の誕生日は、お孫さんの初の誕生日です。少し早目に揚げた幟が青空にそよぎます。ここでも言いたいことを少し抑えたことで幟を見上げる家族の風景が見えてきます。

俳句の基本 言いたいことを少し抑える

読者俳句

ふるさとの俳人たち

その④ 穴井 太

穴井太氏は昭和元年（一九二六年）生まれ。生誕地は九重町恵良。その後、福岡県戸畑市に移住し多感な少年時代を過ごしている。文学をこよなく愛した氏は、十九歳の時、詩誌「詩座」を発刊している。二十歳になった氏は再び九重町の飯田高原へ戻り中学校の教職に就く。その後、戸畑に戻り二十九歳で俳句「未来波」を結成。以降、現代俳句協会でその名を馳せ、長崎原爆忌大会で原爆句碑作品に選ばれるなど俳句界でも注目の俳人となる。昭和四十年からはハガキ版「天籟通信」を発行。その後天籟通信は結社となり、多くの会員に親しまれることになる。句集も相次ぐが「鶏と鳩と夕焼」と「ゆうひ領」は今でも人気の句集。中でも太俳句の代表作（吉良常と名づけし鶏は孤独らし）（ゆう空の雲のお化けへ花いちもんめ）（ゆうやけこやけだれもかからぬ草の罨）は穴井美学として今でも賞賛を浴びている。

師を殴る少年着地できない夏 番長も俺も毛深きゆきのした

教師時代、荒れる学校で、文字どおり体を張った指導、教え子のとの深い心の交流を表す句でもある。氏は、九重町の友人や教え子たちとの長い交流の中で熊谷連生坊氏や甲斐加代子さんから多くの俳人を育てている。

この世から少し留守して梅を見る
この句は平成六年の「花神・現代俳句」の最後に記されているが、氏の辞世の句として語り継がれている。



佳作 十八席

道草や塩俵ばせて酸葉食む 左世美
セーラー姿少女を過ぎて花曇 香澄
昭和の日止まったままの砂時計 豊國
口角を上げてまつすぐ夏に入る 則子
のどけしや茅葺き駅舎屋根工事 直人
昭和の日迷わず今朝のクロワッサン 律子
真つ赤つか七父に見せし洋石榴 勝子
母が逝き二十と五年柿若葉 泉子
早春賦口ずさみゆく散歩かな 文雄

野に山に穀雨の憂い鳥の声 桐友
花々に誘われ風の薫りけり ヤスコ
投網打つ日本列島霾れり 重吉
深き思三つ葉の匂い母の味 一主
葉桜の押葉無数に埋め尽くし いづみ
ほろ苦き路味噌の味夫思う ムツ子
入園式歌子の笑顔両親と 良子
麗らかや片言婆ば三つの子 好美
居所も聞かず終いや花筏 チズ子

（選者・評）孫や子といった素材を俳句で扱うのは難しいと言われます。言わないでも分かるのに「可愛い」「優しい」とつい言ってしまうからです。推薦句は、それを抑えて読み手の想像力に託しています。▽穴井太先生の残された豊富な資料は一度には紹介できませんでしたが、その二でまたお伝えしたいと思います。▽五月号は連休が入るため締め切りがいつもより早目になり、ご迷惑をおかけしました。今月も締めきり日をしっかりと確認ください（りゅうしょう）

お詫びと訂正 4月号の飯田孤石の紹介文中「上村占鮮魚」は正しくは「上村占魚」です。お詫びして訂正いたします。

6月号の締め切りは、5月27日（必着）をお願いいたします。選者（古後粒勝）宅にハガキ等で直接送付いただいても結構です。住所（九重町大字栗野1414番地）



広報このえは、環境にやさしい再生紙と植物性インクを使用しています。



広報このえは、UD文字を使用しています。